



TITLE:

[書評] デイヴィッド・ホークス譯
曹雪芹<石頭記>

AUTHOR(S):

小濱, 陵一

CITATION:

小濱, 陵一. [書評] デイヴィッド・ホークス譯 曹雪芹<石頭記>. 中國文學報 1978, 29: 130-144

ISSUE DATE:

1978-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177343>

RIGHT:

書 評

デイヴィッド・ホークス 譯 曹雪芹《石頭記》

CAO XUEQIN

"THE STORY OF THE STONE"

VOLUME. 1. THE GOLDEN DAYS 1973

VOLUME. 2. THE CRAB-FLOWER CLUB

1977

Translated by David Hawkes (Penguin Classics)

デイヴィッド・ホークス氏による《紅樓夢》の翻譯は、

初の英文全譯を目指すものとして多くの人々の注目と期待を集めているが、一九七三年の第一分冊（第一回～第二十六回）に續いて、昨年漸く第二分冊（第二十七回～第五十三回）が刊行された。「先へ読み進める」という意味で英文讀者の喜びはひとしおだったろうし、《紅樓夢》が英語の世界に着實に根を下ろしていることを考えると、英譯本自

體には餘り縁の無い人間にとっても嬉しいニュースだと言えよう。

それにしても《紅樓夢》の翻譯という、卓越した語學力・該博な知識・豊かな想像力・粘り強さ等を不可缺とする作業の途方も無さを思い起してみると、ホークス氏の並々なぬ力量に感歎せざるを得ない。そして細かい所にまで氣を配り、表現上の様々な苦勞を重ねながらの翻譯作業の根底に、「《紅樓夢》が好きでたまらない」という氏の氣持を感じてしまうと、恥じ入るばかりである。香港「明報」誌上での書評（第一分冊を宋淇氏）に「最使人感動的」として引くホークス氏の序文の最後の一節（p. 46）を紹介しておくたい。

My one abiding principle has been to translate *everything*—even puns. For although this is, in the sense I have already indicated, an 'unfinished' novel, it was written (and rewritten) by a great artist with his very lifeblood. I have therefore assumed that whatever I find in it is there for a purpose and must

be dealt with somehow or other. I cannot pretend always to have done so successfully, but if I can convey to the reader even a fraction of the pleasure this Chinese novel has given me, I shall not have lived in vain.

「私が譲らなかつた原則は「何もかも」を譯すことだつた——雙關語さえも。既に觸れたように「未完」とは言え、この小説が偉大な文豪の全精力を傾け盡くして書かれ（そして書き直され）たからである。だから、その中に見出されるのはどれもある目的のために其處に存在し、何とかして處理されねばならないものだ、と考へた。首尾は上々と必ずしも觸れ込めないが、この中國の小説が私に與えてくれた喜びのひとつかけらでも讀者に傳へ得るなら、私も人生を無駄にしなかつたということになるだろう。」

全篇百二十回の首尾一貫した小説としてほとんど全ての人々を魅了してきた《紅樓夢》は、龔平伯氏等の研究によつて、原作の前八十回・續作の後四十回に分かれることが明らかになったが、百二十回本出現の背景を成す「完結した《紅樓夢》」に對する讀者（「程甲本」序「然原目一百廿卷、今所傳祇八十卷、殊非全本。即問稱有全部者、及檢閱仍祇八十卷、

讀者頗以爲憾。』の渴望が昔も今も變らない以上、翻譯もまた百二十回をその對象とせざるを得ない。然し、續作が周知の事實となつた現在では、單に百二十回本を譯出していくだけでは濟まされないだろう。例えば前八十回校訂に於ける、「盡可能接近曹著の本來面目」と「使它的文字情節能够比較的完整可讀」という二つの原則の狭間で龔氏の苦勞と同様に、ホークス氏の翻譯も原作への配慮（脂硯齋本の參照）と小説としての首尾一貫性とを較量しつつ進められたと思われる。

In translating this novel I have felt unable to stick faithfully to any single text. I have mainly followed Gao E's version of the first chapter as being more consistent, though less interesting, than the other ones; but I have frequently followed a manuscript reading in subsequent chapters, and in a few, rare instances I have made small emendations of my own.

(Vol. 1, Preface, p. 45-46)

「この小説の翻譯ではどれか一つのテキストにべつたりというわけにはいかぬと思われた。私は主として第一回は他に比

べて一貫している（面白さは減るが）高鶚本に従ったが、後の回ではしばしば抄本の異文に據ったし、稀ではあるが、私見によって字句を改めた例もある」。

For the benefit of the learned reader I ought perhaps to explain that this translation in effect represents a new edition of my own.

(Vol. 2, Preface, p. 18)

「専門家のために、この翻譯は事實上私の手になる新しい版本に當たると説明せねばならないだろう」。

翻譯の過程で幾度も選擇と決斷を迫られたことを象徴的に擔っているのは、そのタイトル “The Story of the Stone” ではないだろうか。言うまでもなく、これは《石頭記》の翻譯である。確かに《石頭記》は近年の「紅樓夢研究」の深まりとともにその比重を一段と高めてきた。然し、その名のもたらず興奮は何と言っても研究者の世界を越えるものではなく、二百年にわたって數知れぬ「紅迷」達がその名の下で胸うち震わせた《紅樓夢》の、題名としての重みには到底かなわないのである。百二十回本を一應

の底本としながらも、ホークス氏が敢て《石頭記》を選んだ理由は、恐らく《紅樓夢》の名の下で「紅迷」達が爆發させた興奮にも耐えねばならないだろう。

《紅樓夢》は通常直譯されてタイトルとなっている。“The Dream of the Red Chamber”, “Le rêve dans le pavillon rouge”, “Der Traum der Roten Kammer” 等がそれだが、‘The Western reader’ の用いた言葉に對いつ抱くイメージと《紅樓夢》の原意とはズレを生じてしまふ、というのがホークス氏の意見である。

These translated titles are somewhat misleading. The image they conjure up—that of a sleeper in a crimson-coloured room—is a highly evocative one, full of charm and mystery; but unfortunately it is not what the Chinese implies. In old China storeyed buildings with redplastered outer walls—this is the literal meaning of ‘hong lou’—were a sign of opulence and grandeur. (In Peking it is the former palaces, temples and yamens that have red walls; the habitations of commoners are for the most part grey.)

But 'hong lou' early acquired another, more specialized meaning. It came to be used specifically of the dwellings of rich men's daughters, or, by extension, of the daughters themselves. (Vol. 1, p. 19)

「これら翻譯されたタイトルは些か誤解を招く。それらが浮かび上がらせるイメージ——深紅色の部屋でまどろむ人のそれ——は魅惑と神秘に満ちて甚だ喚起的である。然し、残念ながらそれは中國語の意味する所ではない。舊中國では朱塗りの外壁をもつ層狀の建物——これが「紅樓」の文字通りの意味である——は豊かさや華かさのしるしであった。(北京で朱色の壁をもっているのは昔の宮殿・寺院・衙門であり、一般市民の住居は大部分が灰色である)。然し、「紅樓」は早くにもう一つの、より特殊化された意味を獲得した。それは特に富豪の娘達の住居、或いは敷衍して娘達自身について使われるようになったのである。」

《紅樓夢》の 'a dream of delicately nurtured young ladies living in luxurious apartments' と 'a dream of vanished splendour' という兩義性こそがタイトルとしての重要さを含んでいるにも関わらず、'The Dream of Red Chambers' や 'A Dream of Red Mansions' と云った

書 評

直譯では何も掬い取ることができない——そうした懸念がホークス氏をして《紅樓夢》の採用を断念せしめたのだろう。この判断はまことに賢明という外はない。《石頭記》はタイトルとしての面白味こそ缺く(特に第一回冒頭部分を百二十回本に従う以上)けれども、直譯する上での支障はないし、無難に百二十回全篇をとりまとめることもできる。然し、このことはホークス氏の「紅樓夢」翻譯の断念を意味するものではない。第一分冊のタイトルは 'The Golden Days' となっているが、この母胎は「紅樓夢」である。

警幻道：「就将新製『紅樓夢』十二支演上來。」

(第五回)

'You can do the twelve songs of my new song-and-dance suite "A Dream of Golden Days"', said Disenchantment. (Vol. 1, p. 139)

「金陵十二釵」を歌った『紅樓夢』十二支曲」なのだから、より正確な譯としては 'A Dream of Golden Girls' だろ

うが、そのイメージが本来の 'fragile blossoms' ではなく、'sun-tanned bathing belles' の方向へ流れてしまう、とらう。'The Western reader' の食い違いを懸念して 'Girls' を 'Days' に置き換えるあたりは、實に神経の行き届いた配慮である。また附録として 'The Twelve Beauties of Jinling' and 'Dream of Golden Days' 'Song-cycle' の項で十二釵の運命が詳しく解説されているが、これは序文とともにホークス氏の「紅學」に關する蓄積の深さを物語っている。

'The Golden Days' に續いて、第二分冊のタイトルには 'The Crab-flower Club' が當てられている。この第二分冊は、ホークス氏の表現によれば、'it is a picture of the daily routines in the life of this great household that emerges most vividly from its pages' とらう、實質的には 'The Golden Days' の下に納まる一段と言えよう。ただ獨立した分冊となった以上、何らかのタイトルを冠する必要がある、そこでホークス氏は「海棠社」を選ばれた。「海棠社」は探春の發案で結成された詩社だが、

これは大觀園の少女達がその精華を遺憾なく發揮した（菊花詩・卽景聯句など）という意味で、'The Golden Days' の絶頂を極めている。香菱の詩の習作に象徵されるように、口やかましい禮教の世界から一應解放されている少女達が夢見る自らの最高の在り様というのは、數多くの書物を讀みこなす、詩を作る——「文雅」の一點に盡きる。探春の「孰謂雄才蓮社、獨許鬚眉、不教雅會東山、讓余脂粉耶？」という抱負が、そのことを何よりも物語っているだろう。

「海棠社」結成は大觀園の少女達の本質に最も觸れており、しかも第一分冊の 'The Golden Days' を具體的に繼承發展させているので、タイトルとして最適である。ホークス氏の炯眼にはまことに驚き入る。

とらうで 'Crab-flower' が海棠の譯語に當てられたことには、一つの積極的意味があると思われる。菊花詩を詠んだ際に彼女達が賞味したものは蟹であり、當の第三十八回の回目では「林瀟湘魁奪菊花詩、薛蘅蕪諷和螃蟹詠」と並列されているが、實はこの「蟹」の譯語が 'crab' なのである。従つて 'Crab-flower' は必ず間違ひなく 'crab'、

にも利いていよう。(普通なら、'Begonia' あたりですんなり決まると思われる) これは英譯の妙としか言い様が無い。しかも、'Crab-flower' が喚起するイメージを補強する意味もあってか、表紙には郎世寧の「海棠玉蘭」圖が載せられているが、こうした配慮が單なる讀解を超えた力に據っていることは言うまでもない。ただその意味で、買家の元宵節の賑わいを描くことで極めて密接に繋がっている第五十三回と第五十四回の間が分冊の切れ目となったことに些か疑問を抱く。まして第五十五回が、鳳姐流産・探春理家の一方で臺所の窮迫・召使い達の狡猾さが露わになるという一大轉機の間であるだけに尙更そう感じられる。第五十四回以後をホークス氏がどのような形にまとめられるのか、第三分冊の待たれる所である。

以上タイトルを通じてホークス氏の《紅樓夢》に對する基本姿勢の堅實さ、讀みの深さ等に觸れてきたが、それが個々の翻譯の中でどのように生かされているのかを探ってみたい。

書評

讀者の煩雜さを考慮して脚注は用いられていないが、それは即ち本來脚注等を必要とする語句の翻譯が單なる直譯では濟まないことを意味しようし、挿入句として説明を入れるとしても簡潔でなければならぬ。言わば讀者の苦勞を譯者が一人で肩代わりすることになる。しかも譯者としての責任は一層重くなるのだから大變な決斷である。

寶玉抬頭看見是一幅畫掛在上面、人物固好、其故事乃是「燃藜圖」也、心中便有些不快。(第五回)

Bao-yu glanced up and saw a painting hanging above them on the opposite wall. The figures in it were very finely executed. They represented Scholarly Diligence in the person of the Han philosopher Liu Xiang at his book, obligingly illuminated for him by a supernatural being holding a large flaming torch. Bao-yu found the painting—or rather its subject—distasteful.

(Vol. I, p. 126)

孰謂離才蓮社、獨許鬚眉、不教雅會東山、讓余脂粉耶？

〔第三十七回〕

Why should the founding of poetry clubs be the sole prerogative of the whiskered male, and female versificators allowed a voice in the tunable concert of the muses only when some enlightened patriarch sees fit to invite them.

(Vol. 2, p. 214)

前の例は故事を直接説明することによって、後の例は謝道韞と謝安を普通名詞化することによって、内容を損わず、それほど冗長な感じも與えない。もし「燃藜」や「東山」そのものに拘わったならば、もっと多くの語數を費やさねばならなかっただろう。もちろん直譯が避けられない場合もある。匾額に題された經文と引き合に出された古人の例を挙げておく。

莫若「有鳳來儀」四字。

〔第十七回〕

I suggest "The Phoenix Dance", alluding to that passage in the *History Classic* about the male and female phoenixes alighting "with measured gambol-

lings" in the Emperor's courtyard.

(Vol. 1, p. 332)

咱們也算同病相憐。你也是個明白人、何必作「司馬牛之歎」？

〔第四十五回〕

In other respects we have enough in common to think of ourselves as fellow-sufferers. If you can see this—as with your intelligence I am sure you must—you have no cause to go echoing Si-ma Niu's complaint: "All men have brothers, only I have none."

(Vol. 2, p. 399)

右の二例は語句そのものの説明を補足しさえすればそれで済むのだが、例えば「西廂記」をめぐる寶玉と黛玉のやりとりとなるとかなり厄介である。

寶玉笑道：「我就是個『多愁多病的身』、你就是那『傾國傾城的貌』。」黛玉聽了、不覺帶腮連耳的通紅了。

〔第二十三回〕

Bao-yu laughed: 'How can I, full of sickness and of woe, Withstand that face which kingdoms could o'erthrow?' Dai-yu reddened to the tips of her ears.

(Vol. 1, p. 464)

寶玉笑道：「那『鬧簡』上有一句說的最好、『是幾時孟光接了梁鴻案？』這五個不過是現成的典、難爲他『是幾時』三個虛字、問的有趣。是幾時接了、你說說我聽聽。」

(第四十九回)

'It comes in the section called "Ying-ying's Reply"; said Bao-yu: "Since when did Meng Guang accept Liang Hong's tray?" The question seems rather an apposite one. Those two little words "since when" particularly intrigue me. Kindly expound them for me, will you? Since when did Meng Guang accept Liang Hong's tray?' (Vol. 2, p. 477)

これらの場合直譯で通しているわけだが、もし説明を加えるとなれば、前者は《西廂記》→《紅樓夢》、後者に至っては《後漢書》→《西廂記》→《紅樓夢》、と手順を踏ま

書評

ねばならず、本文中で處理することは困難である。然し率直に言つて、こつた脚注部分が讀者に理解できていなければ、右の二例の面白さはかなり減じることになる。《西廂記》(The Western Chamber)が英文讀者に馴染であれば話は變るが……。ただこのように確かに或る程度讀者に下駄を預けたような箇所もあるとは言え、通常は簡潔な説明を加えたり、本文を少し變改したりといった苦心の跡が屢々見られる。第二十五回のシャム國のお茶(Vol. 1, p. 499)、第四十一回の《尚書舜典》の「百獸率舞」(Vol. 2, p. 309)、第五十回の灯谜に使われた山濤や《禮記月令》の「腐草爲螢」(Vol. 2, p. 509)などが挙げられよう。

もっと大變な難關は「雙關語」である。

封肅忙陪笑道：「小人姓封、並不姓甄；只有當日小婿姓甄、今已出家一二年了。不知可是問他？」那些公人道：「我們也不知什麼『真』『假』、既是你的女婿、就帶了你去面裏太爺便了。」

(第二回)

Feng Su's smile became even more ingratiating. 'My

name is Feng, not Zhen. My son-in-law's name is Zhen, but he left home to become a Taoist more than a year ago. Could he be the one you want?' "Feng" or "Zhen", it's all the same to us," said the runners; "but if you're his father-in-law you'd better come along with us to see the magistrate."

(Vol. 1, p. 67)

小耗子現了形笑道：「我說你們沒見世面，只認得這果子是香芋，却不知鹽課林老爺的小姐才是眞正的『香玉』呢。」

(第十九回)

The little mouse resumed his own shape and smiled at them pityingly. 'It is you who are mistaken. You have seen too little of the world to understand. The vegetable tuber is not the only kind of sweet potato. The daughter of our respected Salt Commissioner Lin is also a sweet potato. She is the sweetest sweet potato of them all.'

(Vol. 1, p. 398)

「甄—眞—假」は「封—甄」と當たり前の文章に譯せられ

を得ず、寶玉の作り話のオチとなった「芋—玉」の妙味も省略を餘儀なくされている。次のような場合も致し方のない所であらう。

我這一輩子、別說是寶玉、就是寶金・寶銀・寶天王・寶皇帝、橫豎不嫁人就完了！
(第四十六回)

I don't care whether it's Master Bao or Prince Bao or the Emperor Bao, I don't ever want to marry anyone.
(Vol. 2, p. 424)

むじの "Master—Prince—Emperor" に繋ぐ譯かれた力量に敬服する。またこの程度原意に迫り得るのか定かではないが、

蕙香道：「我原叫『芸香』，是花大姐姐改的。」寶玉道：「正經叫『晦氣』也罷了，又『蕙香』咧！」

(第二十一回)

'Aroma, sir. My real name is "Soldanella", but Miss Aroma altered it to "Citronella". 'I don't know

why she didn't call you "Citric Acid" and have done with it,' said Bao-yu. (Vol. 1, p. 420)

といった工夫箇所もある。更に寶玉にとっては氣の毒だった、第三十三回の「要緊」と「跳井」の聞き違い（*chiao-chiao* が聞き分けられない）にいつては、前者は、GO AND TELL、後者は、in the well (Vol. 2, p. 147) と、それぞれの意味を損うことなく [el] 音づ結びつけられてゐる。話の流れから見ても、説明を附けた方がよかったのでは…と思われる箇所もある。

琥珀笑道：「篤丫頭要去了、平丫頭還饒他、你們看看、他没吃兩個螃蟹、倒喝了一碟子醋了！」

（第三十八回）

'Even if *she* does,' said Amber, laughing, 'I wouldn't be too sure that Patience will. Look at her, all of you! She hasn't eaten two crabs yet, but she's already finished a saucerful of vinegar!'

(Vol. 2, p. 245)

又吩咐周瑞家的道：「你們自然是知道這裏的規矩的，也不用我吩咐了。」周瑞家的答應：「都知道：我們這去到那裏、總叫他們的人回避。要住下、必是另要一兩間內房的。」

（第五十一回）

She turned to Zhou Rui's wife, 'You know our rules, don't you? I don't need to go over them again.' 'Yes, ma'am,' said Zhou Rui's wife, 'All their people are to keep away from us while we are there, and if we stay they have to give us one or two inside rooms to ourselves. (Vol. 2, p. 518)

前の例は蟹を賞味する具體的な例であるために、「醋」には直接、vinegar、を當てゐるを得ない（第二十一回の「醋罐子」は、jealous bitch、と巧く譯されてゐる）。然し直譯だけでは、どうしてこのあと平兒が琥珀を追いかけなのか、讀者には恐らくわからないだろう。説明の入れにくい場面であることも確かだが……。ただ、vinegar には「氣むずかしい顔」といった派生的意味もあり、英文讀者は固有の了解に達するのかも知れない。後の例では、非公式なが

らも襲人は「通房丫頭」なのだから、ということを読者に再確認させた方がよかったのではあるまいか。

ところで再確認と言えば、常に全体を見ようとするホークス氏の姿勢を感じさせる例にぶつか。中でも極立っているのが湘雲の「舌足らず」のエピソードである。

二人正説着、只見湘雲走來、笑道：「愛哥哥、林姐姐、你們天天一處頑、我好不容易來了、也不理我一理兒。」黛玉笑道：「偏是咬舌子愛說話、連個『一』哥哥也叫不上來、只是『愛』哥哥『愛』哥哥的。回來趕圍棋兒、又該你鬧么『愛』三三。」…… (第二十回)

Just then Xiang-yun burst in on them and reproved them smilingly for abandoning her: 'Couthin Bao, Couthin Lin: you can thee each other every day. It'th not often I get a chantle to come here; yet now I *have* come, you both ignore me!' Dai-yu burst out laughing: 'Lisping doesn't seem to make you any less talkative! Listen to you: "Couthin!" "Couthin!" Presently, when you're playing Racing Go, you'll be all "thicktheth" and "theventh"!'

音に音で對した「一→愛」の「s→th」への置き換えは妙譯である。'Note on Spelling'や中國語の發音を English, Southern English, Italian, German, French 等の近似音を使って解説したホークス氏なればこそ……といった感じがする。王際眞氏は 'made fun of River Mist's habit of lisping' と簡譯してゐるのづいゝ様がないが、次に擧げる直譯・意譯に比べれば、「s→th」譯は讀者を最も樂しませてくれるだろう。

While these two were having this colloquy, Hsiang-yün was seen to walk in! "You two, Ai cousin and cousin Lin," she ventured jokingly, "are together playing every day, and though I've managed to come after ever so much trouble, you pay no heed to me at all!" "It's invariably the rule," Tai-yü retorted smilingly, "that those who have a defect in their speech will insist upon talking; she can't even come out collectly with 'Erth' (secundus) cousin, and keeps

on calling him 'Ai' cousin, 'Ai' cousin! And by and by when you play 'Wei Chi' you were sure also to shout out yao, ai, (instead of erh), san; (one, two, three)."

(tr. by H. Bencraft Joly)

While they were skirmishing in this way Cousin Little Cloud came skipping along. "You two have each other the whole time; you're together day after day," she said with her comical-sounding lisp. "I come here so seldom, you might really give a little more time to me." "What a funny pronunciation the little one has!" exclaimed Black Jade, mockingly mimicking her. "If you counted one, two, three her way you would bite your tongue in two."

(The English translation, by Florence and Isabel McHugh, is based on the German version which Dr. Franz Kuhn has translated and adapted from the Chinese.)

さて譯そのものも見事なのが、こゝに取上げられたのは、この「舌足らず」のエピソードがこの場限りで終らずに、湘雲の一つの性格という形で實に自然に活用され

書 評

つゝる點もある。

不長進的毛病兒！多早晚才改呢？ (第二十一回)

'Nathly habit!' she said, 'It's time you gave it up!'
(Vol. 1, p. 417)

你要說、你說給那些小性兒・行動愛惱人・會轄治你的人聽去。別叫我睬你！
(第二十二回)

You can keep that kind of talk for that sensitive, easily upset person you were talking about. She knows how to handle you. Don't try it on me: it makes me *thick*!
(Vol. 1, p. 437)

(黛玉笑道) 眞眞你是個糊塗人。」湘雲笑道：「你才糊塗呢！……」 (第三十一回)

'...You really are rather a silly.' 'Thilly yourself!' said Xiang-yun.
(Vol. 2, p. 120)

優子！你來嘗嘗！ (第四十九回)

‘Thopy!’ she called out to her. ‘Come and try thome!’ (Vol. 2, p. 485)

一見してわかるように、ホークス氏は氣まぐれに「s↓th」を使っているわけではない。反撥なり呼びかけなり、湘雲の思わず口を衝いて出る言葉が対象となれている。このような計算された手法は、湘雲なる人物を餘程理解していないと到底考えつかないし、また敢て用いることもできないのではあるまいか。

その他劉姥姥以上に廣大な賈府や見も知らぬ什器類にどぎまぎさせられ通しの讀者にとって、鳳姐が侍女を訊問した穿堂(第四十四回)が第十二回の‘which had once been the scene of Jia Rui’s night-long sufferings’のやがてあるとか、寶玉の金簪笠(第四十九回)が第四十五回の‘the Prince of Bei Jing’s present that Dai-yu had so much admired’であるとかいった確認は、建物や器物そのものについての説明とはまた違った安堵感を與えてくれるのである。

最後に詩について觸れておきたい。第二分冊の附録に‘Regulated Verse’という項があり、中國の詩がどういものであるか、それを英譯することにとどのような困難が伴うか等について説明されている。そして翻譯で殘された「限韻」の効果については

But though the rhyme-scheme I have adopted is a somewhat different one from the Chinese and my renderings may be accounted of little or no poetic value, at least they should give the reader some idea of the cross-word puzzle nature of the task which the young members of the poetry club had set themselves, and appreciate why several of them elsewhere in the novel express vehement dislike of what they call ‘set rhymes’. (Vol. 2, p. 584-85)

「私が採用した押韻の形式は中國語のそれとは些か異なったものであり、その翻譯は詩的價值などまず持ち合わせていないと看做されるかも知れないが、少なくとも詩社の年若き面々が自ら當てがった課題のクロスワード・パズルの性質に關するなにがしかの印象を讀者に與えようし、他の箇所で彼等の何人かが「限韻」と言われるものに對して非常な嫌惡を示

す理由も察知させるであらう。」

「限韻」に關して原文・譯文ともに面白い箇所を一つ舉げておく。黛玉が香菱に十四寒の韻で月の詩を作らせる（第四十八回）が、その時の探春と香菱の珍問答である。

一時探春隔窗笑說道：「菱姑娘、你閒閒罷。」香菱怔怔答道：「『閒』字是十五刪的、錯了韻了。」衆人聽了、不覺大笑起來。

and when Tan-chun jokingly called to her through the window to 'call it a day,' she merely looked up with a somewhat dazed expression and replied that "day" didn't rhyme: the rhyme-word she was using was "sky". The others, hearing this, all burst out laughing.

(Vol. 2, p. 464)

それにしても香菱の三つの詩を、'sky・light'（十四寒）で譯し通されたホークス氏の力量はさすがである。

書 評

第五十回の聯句の場合も「二蕭」の韻を、'Eyes' と置き、句の順序を多少入れ換えながら全七十句を一つの型の中に収め切っているのだが、ここでより注意を惹くのは譯が脂硯齋本に従っていることである。實は黛玉に促された寶玉が仕方なく二句ひねった後、百二十回本ではそのまま寶琴の句が續くのだが、脂硯齋本ではその間に湘雲の「你快下去。你不中用、倒耽擱了我。」という言葉が入っていて、これが後の落第した寶玉に罰（訪妙玉乞紅梅）を與える條にピリッと効いている。ホークス氏もその點が捨て難く思われたのだろう。

第四十九回の「默香菱之心苦、瘋湘雲之話多」の一段も、百二十回本では「癡癡癡癡、那裏還象兩個女兒家呢？」と面白味が無いのだが、ここもまた脂硯齋本に據った譯となっている。この二句は實に自然に、「你到我那裏去、就說我們這裏有一個外國的美人來了、做的好詩、請你這『詩瘋子』來瞧去；再把我們『詩默子』也帶來。」（第五十二回）に効いており、是非欲しい所である。こうした點からもホークス氏の細かい配慮を窺い知ることができよう。

以上割合特徴的な箇所を中心にホークス氏の妙譯を味わってきたが、この他一見何でもないような「妹妹」や「冷笑道」といった言葉も、その場の雰囲気に応じて様々に譯し分けられているし、本名は拼音（寶玉 Bao-yu・黛玉 Dai-yu・賈母 Grandmother Jia・王夫人 Lady Wang など）・それ以外は英譯（妙玉 Adamantina・襲人 Aroma・晴雯 Sky-bright など）の使い分けや對句仕立てを守り通した回目的翻譯等も地味な苦勞だと言える。評者の力不足のため、とりわけ詩の翻譯そのものに觸れなかったことが残念だが、ホークス譯全體から原文を大切にすることの重要性を改めて痛感させられた。常に全體を見据えながら、個々の文章の妙味を引き出そうとする——ホークス氏の基本的姿勢は非常にしっかりとしている。そうした翻譯が一人でも多くの人に貪り讀まれること、また出来るだけ早く全五冊完結することを願って已まない。

（京都大學 小濱陵二）

（魯迅撰 「中國人民解放軍五一〇一部隊理論組」

註 《吶喊》

北京 人民文學出版社 一九七六年十月 二〇三頁

（魯迅撰 「天津碱廠工人理論組」、「南開大學中文系」

註 《彷徨》

北京 人民文學出版社 一九七六年十二月 一九八

頁

中國要重註魯迅(1881-1936)全集之事，早有傳聞，「四人幫」事件後，中國「國家出版局批判組」寫的《圍繞魯迅著作出版問題的一場搏鬥——揭露「四人幫」破壞魯迅著作出版工作的罪行》一文，談到其中的波折：

一九七五年十月二十八日，周海嬰同志就魯迅著作的注釋、出版和研究工作等方面存在的嚴重問題，寫信反映給偉大領袖毛主席。毛主席接到周海嬰同志的信後，于一九七五年十一月一日作了重要批示，贊成周海嬰同志的意見，指示作出決定，「立即實行」。不久，毛主席、黨中央又